第3回　日本医師会

赤ひげ大賞

頼れる「かかりつけ医」

第3回「赤ひげ大賞」（5人）

岩田千尋	岩手	岩手県立大槌病院院長
西嶋公子	東京	西嶋医院院長
鬼頭秀樹	徳島	那賀町立上那賀病院院長
二ノ坂保喜	福岡	にのさかクリニック院長
古川誠二	鹿児島	パナウル診療所所長

日本医師会　横倉義武会長

日本医師会が共催、ジャパンワクチン特別協賛により、地域に密着して人々の健康を支える医師の功績をたたえ、広く国民に伝えるとともに、次代の日本を支える地域医療の大切さをアピールする事業として平成24年に創設した。全国の都道府県医師会から推薦された「予防医療を通じて地域住民の健康を支えている医師」「離島や過疎地域での活動など地域の現場医療に貢献した医師」を選考委員会で審査し、5人を表彰する。

かかりつけ医に光

「日本医師会　赤ひげ大賞」の名称の由来は、山本周五郎の時代小説「赤ひげ診療譚（たん）」にあります。

「赤ひげ先生」といえば、一般の方にもよく知られていますし、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く、頼もしい医師というイメージをお持ちの方も多いのではないでしょうか。

わが国は、2025（平成37）年に高齢化のピークを迎えますが、高齢者の方々が健康で元気に生活していくためにも、何でも相談できる「かかりつけ医」の存在はますます重要になってまいります。

今回「赤ひげ大賞」を受賞した5名は、まさにこの「かかりつけ医」の仕事を実践している方々ばかりです。日本医師会は、今後も、地域の皆さんが安心して暮らしていくことができるよう、地域住民の方々に寄り添った形で医療を展開している全国の赤ひげ先生にスポットを当て、その功労を顕彰してまいる所存です。

ＢＳフジで11月29日放送

５人の大賞受賞者の日頃の活動と表彰式の模様を紹介した番組「密着！かかりつけ医たちの奮闘～第３回赤ひげ大賞受賞者～」はＢＳフジで11月29日午後２時から放送予定。

岩田千尋氏（岩手県大槌町）

笑顔を絶やさず（小野淳一撮影）

いわた・ちひろ　岩手県立大槌病院院長。昭和22年、埼玉県生まれ。67歳。岩手医科大医学部卒。同大大学院医学研究科修了後、51年から大槌病院に勤務し、平成５年から院長に就任。東日本大震災後の地域医療の復興に尽力している。

震災後の医療再建に尽力

「いくつになったんだっけ。えっ、94歳。たいしたもんだ。お大事に」

「先生も、お大事に」

仮設の診療所では、こんな温かいやりとりが交わされる。「陸の孤島」と呼ばれた岩手県大槌町で38年。千年に1度といわれる未曽有の東日本大震災にも負けず、地域医療の現場に立ち続けている。

「気がつけば、ここで40年近くたっていた」

埼玉県秩父市出身、祖父から続く医師の家系。大学進学で岩手と縁ができた。昭和51年に後輩と2人で赴任したが、若い医師はほかにいなかった。ただ、決して医療後進地域ではなかった。日本中が好景気にわいた昭和50年代、人口も多くさまざまな経験が積めた。当時、最先端の超音波治療など高度な医療も患者に施すことができた。近年は医師不足が進み、約10人いた常勤医は3人まで減少。121あった病床数を半減するなどしながらも、隣接する釜石市と連携し、地域医療を支えてきた。

そこへ震災が起こった。犠牲者は出なかったものの、津波は病院の2階まで押し寄せた。53人の入院患者のうち、約30人は自力で動けなかった。搬送用のヘリはいくら待っても来ない。スタッフ総出で避難所まで車椅子で運んだ。

それからは医療体制の立て直しに奔走した。地域の人脈を生かして、土地を確保。約1カ月で内科の診療を始め、約3カ月で現在の仮設診療所に移った。全国から応援に駆けつけた医師団とともに、津波で医院を失った地元の開業医たちも診療にあたった。これまで培ってきた地域のネットワークのなせる業だった。

「県立だけど、地域の医師たちでつくる病院だ」

新しい大槌病院は平成28年度に開院する。人口減少と医師不足に対応する現代の地域医療の最前線で生涯現役を誓う。（高木克聡）

西嶋公子氏（東京都町田市）

医者の前に「一人の住民」（寺河内美奈撮影）

にしじま・きみこ　西嶋医院院長。昭和20年、富山県生まれ。69歳。東京医科歯科大医学部卒。国立小児病院、国立療養所神奈川病院を経て、54年に西嶋医院開業。住民のボランティアグループを結成し、ケアセンターを設立するなど地域医療に尽力している。

「一住民」として活動

東京都町田市の閑静な住宅街にクリニックを開設したのは、昭和54年10月のことだった。

「国立小児病院で白血病の子供を診ていた。でも、最期を家族と過ごしたくても、病院は親が寝泊まりできない。個人に寄り添う医療をしたいと思った」

同じころ、父親に認知症の症状が表れ始め、介護が必要となった。病院では、ベッドに体を縛り付けるなどの不適切な対応が行われていた。病院に不信が募る一方で、訪問診療先で目にしたものは、血縁に頼る自宅介護の限界だった。「これは、父や母（の世代）の問題じゃない。これから年を取っていく自分たちの問題。誰かが何かをしてくれるのを待っていたらいけない」と危機感が芽生えた。

家庭で最期まで暮らしたいという願いをかなえるにはどうすればいいか。医師の枠を超え、より良い介護を求めて住民と活動を始めた。普通の人がどうやって関わるか。この問いに答える形として平成元年に設立されたのが、住民のボランティアグループ「暖家（だんけ）の会」だ。

食事を余分に作り、1人暮らしのお年寄りにおすそ分けする。お年寄りが不安で入浴できなかったら、自宅を訪ねて入浴を手伝う。住民の手で行政サービスの「隙間」を埋めた。

「都会は、『隣は何をする人ぞ』になりがち。だから、誰もができるお手伝いの方法を複数用意することで、地域を巻き込みたかった」。住民とともに地域ケアの拠点設立を求め、デイサービスなどを行う「ケアセンター成瀬」が8年に開設された。センターは今、地域住民が気軽に集まれる場所としても機能する。

「現場から声を上げることが大事。医療も福祉も参加型であるべきです」。医者の前に、一住民を常とする。その意志は力強い。（道丸摩耶）

鬼頭秀樹氏（徳島県那賀町）

指先にすべてを集中（飯田英男撮影）

きとう・ひでき　徳島県那賀町の町立上那賀病院院長。専門は外科。昭和29年、大阪府生まれ。60歳。山口大医学部卒、大阪市立大大学院修了。大野病院、和泉市立病院外科部長勤務などを経て、平成18年4月に那賀町立上那賀病院へ移る。20年4月から現職。

「医は仁術」を追求

急峻（きゅうしゅん）な山々に囲まれた徳島県那賀町。地域で唯一の入院機能を持つ町立上那賀病院で患者に向かい始めて8年半がたち、今では地域住民の「守り神」というべき存在だ。

だが、大阪の和泉市立病院外科部長を辞任し、地域医療の世界に飛び込むことは大英断だった。

「尊敬する先輩医師が無医村に行かれたので、僕もどこかあればと。ほんま単純な気持ちでした。インターネットで検索したら、たまたま徳島で募集していましてね」。むろん、縁なき土地への家族との移住に不安がなかったといえば嘘になる。

着任してみると、手術を連日こなしていた和泉時代とは勝手が違った。「お年寄りが非常に多く、高血圧、糖尿病、整形疾患がほとんど。僕は外科やから、薬を微妙に調節して苦痛を和らげる治療をしたことがなかった。家に帰って嫁さんに、『僕にどうせい言うんや』と言うたこともあったんですよ」

それから内科治療の猛勉強が始まった。「本を読んだりして細かなことが分かってきたら、だんだん面白くなってきてね」。いずれも懐かしい思い出だ。

当初は、外科医なのに簡単な手術さえできないジレンマに苦しんだ。態勢が整わず患者を大病院に送らざるを得なかったのだ。「せめて胆石の手術ぐらいは」と考えていたとき、自治医大から派遣されてきた若い医師が協力を申し出てくれた。今では年間60～70件の手術を行う。

「総合診療医がいるだけではだめ。週1回ぐらい専門医が来て、ここで完結できる治療を広げていくようにしなければ」と地域医療のあるべき姿を描く。

「昔は『医は仁術』と言ったが、経営や利益を考えない医療をしたい」。その目は遠く理想を追っている。（河合雅司）

【主催】日本医師会、産経新聞社　【後援】厚生労働省、フジテレビジョン、ＢＳフジ　【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

力をあわせて、未来を守る

ワクチンによる予防こそが、これからの医療の中核になる。
ましてや感染症の予防は、ひとりを守るだけでなく、
その周辺の人々、ひいては社会や、この国そのものを守ることになる。
そう信じる私たちは、新しい時代に向かって、力強く歩み続けていきます。

ジャパンワクチン株式会社

japanvaccine.co.jp

第3回 日本医師会 赤ひげ大賞

地域で日夜、献身的、精力的に医療活動に取り組んでいる医師を顕彰する第3回「日本医師会　赤ひげ大賞」の表彰式が31日、東京都内で開かれる。大賞に選ばれた全国各地の5人の医師について、日ごろの活動と選考会の模様を紹介する。

厳粛な雰囲気で行われた選考会＝東京都文京区の日本医師会館（野村成次撮影）

■選考委員

羽毛田信吾	昭和館館長、宮内庁参与
向井千秋	宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙医学研究センター長
山田邦子	タレント
小林光恵	作家
二川一男	厚生労働省医政局長
今村聡	日本医師会副会長
松原謙二	同副会長
今村定臣	同常任理事
石川広己	同常任理事
外山衆司	産経新聞社専務取締役
河合雅司	同論説委員

■オブザーバー

長野明　ジャパンワクチン会長

21人の候補者から絞り込み

「赤ひげ大賞」を決める選考会は東京都文京区の日本医師会館で開かれ、各都道府県医師会の推薦を受けた21人の候補者から5人に絞り込む審査が行われた。

審査は「予防医療や学校保健、公衆衛生などの活動を通じた健康管理への取り組み」「医療環境整備や社会活動を通じたまちづくりへの貢献」など4項目について、それぞれの医師が地域にどれだけ貢献しているかを評価した。

羽毛田信吾・昭和館館長は「後に続く医師の励みになるかという点も重視した」、作家の小林光恵氏は「他職種との連携や、どんなチーム医療が行われているかに注目した」とそれぞれコメントした。また、福島靖正・厚生労働省大臣官房審議官（二川一男同省医政局長代理）は「都市部におけるコミュニティーづくりのモデルとなる素晴らしい先生ばかりだった」と話した。

向井千秋・宇宙航空研究開発機構宇宙医学研究センター長は「『赤ひげ』とは何をした人なのか、特に若い世代は知らない」と指摘。「素晴らしいことをした人であり、その名をとった賞なのだと、もっと周知すべきだ」と提案した。

司会を務めた石川広己・日本医師会常任理事は「全員が活躍されている先生ばかりで、今回も甲乙つけがたかった」と話した。

地域の住民に寄り添う

二ノ坂保喜氏（福岡市早良区）

真剣なまなざし（奥原慎平撮影）

にのさか・やすよし　医療法人にのさかクリニック院長。昭和25年、長崎市生まれ。63歳。長崎大医学部卒。長崎大付属病院第一外科、青洲会病院、福西会川浪病院を経て、平成8年、にのさかクリニックを開設。自身が代表を務める「バングラデシュと手をつなぐ会」などで、海外ボランティア活動にも尽力している。

「温泉に行ったそうだけど、具合悪いのに大丈夫だった？」

往診先でベッドの男性（63）に親しげに声をかけた。男性は末期の大腸がんを患っており、数メートル先のトイレへ行くにも呼吸が乱れて10分近くかかる。それでも、病院よりも自宅療養を選んだ。

「病院は周りの患者に気を使うけど、家は自由だから。死ぬときは悔いのないようにしたい。頼りになる二ノ坂先生もそばにいる」

「特別なことをしているわけではありません。患者と家族の生活を支援するのが私の役目です」と語る。

自宅で息を引き取るという、かつては当然だった「死に方」は、現代の日本ではまれなケースとなっている。厚生労働省によると、がん患者が家で亡くなる在宅死亡率は8・3％（平成21年）にすぎない。

「死を意識した患者さんも、住み慣れた家では表情が豊かになる。人生の最後を人間らしく過ごすためにも、在宅医療の充実は欠かせないんです」

自宅での看取りに、理解を深めようと、平成19年には地域の往診医や訪問看護ステーションの情報をまとめたガイドブックを作成した。行政と協力し、生活のサポートとして、患者や家族の話を聞く「傾聴」や、車椅子の使い方を学ぶボランティアの養成にも努めている。（奥原慎平）

患者と家族の生活支援

男性は笑顔で、こう語った。

「住み慣れた家で、家族に看取られながら死にたい―。福岡市南西部の住宅街にある「にのさかクリニック」院長として、そんな患者の願いに応え続けてきた。

医師や看護師ら約20人のスタッフとともに、200人近い在宅患者を往診して回る。患者一人一人30分ほどかけて、体調を確認し、痛みがひどければ、鎮痛剤を処方する。

古川誠二氏（鹿児島県与論町）

患者の笑顔が源泉に（甘利慈撮影）

こかわ・せいじ　パナウル診療所所長。昭和24年、徳島県生まれ。65歳。久留米大医学部卒。徳島大医学部付属病院、徳之島徳洲会病院、与論町立診療所などを経て、平成3年にパナウル診療所開設。若いころから離島医療を志し、総合的な能力を持つプライマリーケア医として、地域住民に寄り添っている。

鹿児島県の最南端にある人口約5400人の与論島。いわゆる「プライマリーケア医」として26年間、与論町立診療所や「パナウル診療所」所長として地域医療を支えてきた。与論島の古語で、パナは「花」、ウルは「サンゴ」を指す。

プライマリーケア医とは、住民に寄り添い、内科や外科、耳鼻科、皮膚科などあらゆる診療を行う総合的な能力を持った医師のことだ。「熱っぽい」「目が痛い」「釣り針が刺さった」「日差しで皮膚をやけどした」―。さまざまなケガや病気に向き合い、毎日50人に上る患者を診る。

治療や救急搬送の優先順位を決める「トリアージ」を確実にすることも重要で、急患が出た場合、「判断を誤り、島外の大病院にヘリで搬送する指示が遅れると、取り返しがつかないことになる」。

医師を志したのは、小学生のころ2つ下の妹をジフテリアで亡くし、両親の悲嘆を目にした体験が大きい。大学卒業後、民間病院に勤めているとき、離島で活躍する医師の話を聞く機会があり、「厳しい環境にある離島の医療に貢献したいという思いが強くなった」という。

その後、実際に離島医療に携わる医師の指導を受けるなどして研鑽を積み、昭和60年、鹿児島・徳之島の民間病院院長として実践をスタート。医師不足に悩む与論島の求めに応じて与論町立診療所に赴任し、診療所閉鎖後も「住民と寄り添い続けたい」との思いから、パナウル診療所を開いて島に残った。

「島んちゅ」の笑顔支えに

後進教育にも熱心で、学生の実習や卒後研修を年間50人ほど受け入れる。また、公民館で英会話教室を開くなど医療以外でも住民と向き合う。「実直でピュア」という〝島んちゅ（島民）〟の笑顔が、日々のモチベーションだという。（山口暢彦）

長野明ジャパンワクチン会長　「日本のどの地域で暮らしていても、等しく必要な医療が受けられる」。その実現に向けた不断の努力が、全国各地でさまざま行われていることを今回も強く実感しました。

受賞された皆さまは、住民と協働した在宅医療体制の構築、離島医療や僻地医療への献身的な取り組み、東日本大震災後も被災住民とともに歩む医療、そして心豊かなふれあいある在宅ホスピスづくりなど、何よりも地域住民の苦楽をわがこととして接し、診療活動をされておられることに敬意を表します。

「赤ひげ大賞」が国民にとって、かかりつけ医を中心とした関係者の皆さまのご活躍ぶりを知る機会となることを願っています。

■推薦方法と推薦基準

【推薦方法】各都道府県医師会長が1人ずつ推薦

【推薦基準】日常の診療に加え、▷予防医療・公衆衛生活動などを通じた地域住民の健康管理及び医療環境の整備のほか、障害をもった方や高齢者が安心して暮らせるよう、医療を通じたまちづくりに取り組む医師▷医療資源の乏しい地域など、地方あるいは都市ならではの厳しい医療環境の下で住民を支えている医師▷原則として70歳未満の現役の医師

羽毛田信吾委員　どの候補者も大変すばらしく、審査をしていて頭の下がる思いだった。今後、地域医療は胸突き八丁（苦しい正念場）になるだろう。そのため、地域の医療や住民に心を寄せるお医者さんの存在は、ますます大事になってくる。「赤ひげ大賞」の存在が、ほかの医師にとっても地域医療に向かう契機になってほしい。

向井千秋委員　先生方は大変な熱意をもって地域医療に尽くされ、在宅・終末医療や若手の教育をされている。現代は少子化、高齢化、核家族化などの問題があり、住民と医療機関、医療機関同士の関わりが必要だ。それらをつなぐシステムを構築することも、昔の赤ひげにはない今の赤ひげに課されていることだと感じている。

山田邦子委員　赤ひげ大賞受賞の先生方、おめでとうございます。私などが選考してよいのか、回を重ねるたびに責任の重大さを感じております。病気になれば、誰しも心細くなりますが、こんなにも私たちに向き合ってくださる医師が全国にいるなんて、本当に心強いことです。お体に気を付けて、いつまでもよろしくお願いいたします。

小林光恵委員　どの先生方も各地で活躍され、差をつけられないくらいだった。私は元看護師の視点を大事にして選考に参加した。医師が看護師や栄養士らとの他職種からなるチーム医療をどう生かしているか、また、若い人が到底まねできないと感じる医師ではなく、がんばれば目指すことができる医師像に着目した。

福島靖正厚生労働省大臣官房審議官（二川一男委員代理）　受賞された先生だけでなく、地域住民も一緒になりながら、地域作りを進めていらっしゃることが素晴らしかった。高齢化が進む中、地域包括ケアシステムの構築を進めることが必要になってくる。「赤ひげ大賞」によって、都市部におけるコミュニティーづくりのモデルケースが、いろいろな形で示されればと思う。

こんな疑問はありませんか？
生まれたての赤ちゃんには免疫があるの？
ワクチンで、どんな病気が防げるの？
赤ちゃんのときにかかりやすい感染症って？
ワクチンにはどんな種類があるの？
ワクチン接種はいつから受けられるの？
ワクチンスケジュールを上手に管理するには？
ラブ♥ベビ.jp
LovesBaby.jp
愛する赤ちゃんを守るための感染症&ワクチン情報サイト
ラブ♥ベビ.jp は、みなさまの疑問にお答えします。
“ラブベビ.jp”は、赤ちゃんがかかりやすい感染症とワクチンに関する情報が満載のパソコン&スマホサイトです。いつでも気軽にアクセスして情報を集めましょう。ワクチンのなかには、接種できる期間が限られているものもあるので、特にもうすぐママ・パパになる人は要チェック!
主なコンテンツ
● ワクチン接種スケジュール表
● ロタウイルスワクチン接種期間チェック
● 感染症&ワクチン情報
ワクチンデビューは生後2か月で!!
ラブベビ　検索
パソコンから ▼
http://LovesBaby.jp/
スマホから ▼
http://LovesBaby.jp/smart/
スケジュール管理アプリ「ラブベビ手帳」
ワクチンスケジュールの管理機能やワクチン接種日前アラート機能、写真・アイコン付きのひとこと日記機能、赤ちゃんの体重/身長記録・グラフ化機能など便利なアプリです。
*iOS, Android 対応
「ラブベビ手帳」はこちらからダウンロードできます。
ジャパンワクチン株式会社は、日本医師会「赤ひげ大賞」へ特別協賛しています。
力をあわせて、未来を守る
ジャパンワクチン株式会社